

コンクリートで覆われ煉瓦は見えない現在の犬吠埼灯台



成田 歴史 玉手箱

●59回●

歴史と伝統文化の
まち・成田。市内には、
歴史ある文化財が多数あります。

下総地区で焼かれた犬吠埼灯台の煉瓦

関東大震災・空襲にも耐え130年ぶりに里帰り

フレンドリーパーク下総内にある下総歴史民俗資料館に、平成14年4月、この地区にゆかりのある一つの資料が運び込まれました。それは、江戸時代の豪商・古張庵に「国のとっはずれ」と詠われた銚子からの贈り物「煉瓦」でした。銚子のシンボルといえば犬吠埼灯台。しかし、灯台の建築用材に使用されている煉瓦が、下総地区高岡の源田河岸付近（現在は利根川の河川敷となっている）で焼かれたことはあまり知られていません。

灯台の煉瓦は下総地区高岡の土を使い、隋朝達・青野五郎兵衛・田島定吉らによって、何と19万3,000枚が焼かれ、当時の金額で1,385円掛かったという領収書が残されています。煉瓦は灯台をはじめ官舎や倉庫などにも使われ、犬吠埼灯台は日本で24番目の灯台として、明治7年11月15日に竣工しました。

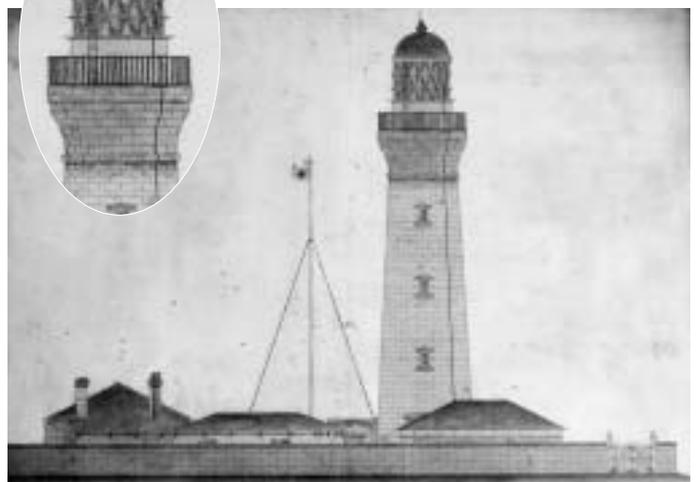
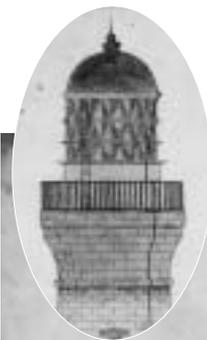
元館長の島田七夫さんは、「寄贈された煉瓦は、当時、退息所と呼ばれた旧官舎の建物に使用されたもの。平成14年3月に開館した灯台資料展示館の建設に伴い取り壊されたものです。灯台設計者で英国技師プラントンの研究や灯台関係者との交流などを図る市民団体「犬吠埼プラントン会」のご厚意でした。土台石は銚子石で、煉瓦と煉瓦は漆喰で固められブロック状になっています」と、その経緯を語ってくれました。

ところで、灯台建設において最も使用する煉瓦を、国産品にするのか外国産に求めるのかは、次のようなエピソードが残されています。日本人技師の主席を務めた中沢孝政氏は国産品を主張し、設計者のプラントン技師は英国製でなければ適さないと譲りませんでした。しかし、中沢氏は国産品が適さない理由はないと四方八方歩き回り、何度か失敗を繰り返しながらもようやく高岡地先で良質な土を見つけ、この地で生まれた隋朝氏らに煉瓦の製作方法を教え、苦心の末に製造に成功しました。その結果、すべて国産の煉瓦で灯台を造ることになり、工事

費が随分と節約できたと大変喜ばれたということです。そして、中沢技師が工事期間中、宿にしていた銚子市の加瀬さん宅にお礼として完成時の灯台の絵を贈っています。煉瓦一枚一枚が丁寧に描かれた精巧な絵で、当時の灯台の姿を知る貴重な資料の一つです。

「関東大震災や一部損傷を受けたものの太平洋戦争の空襲にも耐えた灯台。こうしてここにあることが素晴らしいこと」と島田さん。そして130年ぶりに生まれ故郷に戻ってきた煉瓦は、この資料館で第二の人生を歩みはじめました。

資料館前に展示されている煉瓦ブロックと土台石



中沢孝政技師から贈られた灯台完成時の絵（明治7年3月・加瀬一男氏所蔵）

編集後記

成田高校「選抜」初勝利おめでとうございます。ベンチ裏から選手を、アルプススタンドから紫一色に染まる応援席を追いかけようと職員2人で甲子園に。アウトの一つ取るたびに「よっしゃ!」「いいぞ!」とお祭り騒ぎのようにヒー

トアップする応援団。アルプス席担当の私は、勝利を信じ最後まで声をからしながら応援をする様子を収めようとシャッターを切り続け、初めてグラウンド内にカメラを向けたのは勝利を収め選手がスタンドに駆け寄ったときでした。